

研究論文

実習評価ルーブリック評価基準に見られる記述の問題点

野呂 健一

高田短期大学キャリア育成学科

1. はじめに

近年、様々な分野においてルーブリックの開発・検討が進められているが、日本語学・言語学の立場から評価基準の記述のあり方について考察した研究は管見の限り見当たらない。筆者は、福田他(2018)で、試作したルーブリックの分かりにくい表現についてのアンケート結果から、文の構造によるものと語の意味によるものがあることを示したが、本研究では、実際に用いられているルーブリックを考察対象とすることによって、より多くの問題となる表現を見いだすことができると考えられる。

看護・介護分野を中心に収集した実習評価ルーブリックの評価基準の記述について個別に検討し、曖昧性や漠然性のために評価のぶれが生じる恐れのあるものを抽出したのち、曖昧または漠然とした表現となっている原因について、日本語学的観点から検討する。

2. 曖昧性と漠然性

1つの表現に複数の解釈が可能な場合に、一般的には「この文は曖昧である」とか「この表現は漠然としている」のように言われることがある。曖昧性と漠然性は混同されることが多いが、言語学では異なる概念である¹。今仁(2006: 34)は、曖昧性と漠然性の違いについて以下のように述べる。

一般に、Aが曖昧であるとは、Aがnとおりに($n \geq 2$)の意味解釈をもち、かつ、nとおりに区別できる場合をいう。他方、Aが漠然であるとは、意味解釈をn通りに厳密に分けることができず、そこに何らかの連続性がある場合をいう。

このように、曖昧性とは、1つの表現が2通り以上の異なる意味に解釈できることを指し、漠然性とは、1つの表現の意味があやふやで不明瞭であることを指す。以下に、曖昧性と漠然性の例を示す。(1)(2)が曖昧性の例であり、(3)(4)が漠然性の例である。

(1) 白い鳥と魚がいる。今仁(2006: 34)

(2) どの狼も何かを見ていた。今仁(2006: 34)

(3) ナイフはもうちょっと右に落ちていました。今仁(2006: 35)

(4) この猫、太っているね。今仁(2006: 35)

(1)は、「魚と白い鳥がいる」と「白い魚と白い鳥がいる」の2通りに解釈できる。「白い」が「鳥」だけを修飾するのか、「鳥」と「魚」の両方を修飾するのかによって、意味が決まる。(2)は「狼たちはそ

れぞれ何らかの対象を見ている」と「狼たちは同じものを見ている」という読みが可能である。不定の対象を示す「何か」が、「どの狼も」が示すそれぞれの狼に対応するかどうかによる違いである。いずれの場合も明確に異なる2通りの解釈が可能である。

一方、(3)は「もうちょっと右」がどのくらいの距離を表しているのかが明確ではない。(4)は、どこからが「太っている」という評価に当てはまるのかが不明である。このように、漠然とした表現というのは、表現の意味が明確に限定されておらず、はっきりしないものを指す。

曖昧性を持つ文を曖昧文というが、野田(2002)は、曖昧文を以下の4種類に分類している。

- ① 語彙論的なあいまい文
- ② 文法論的なあいまい文
- ③ 意味論的なあいまい文
- ④ 語用論的なあいまい文

野田(2002)によると、①が「文中の個々の単語がもつ意味にあいまいさがあり、そのために文全体の意味があいまいになるもの」(同書:8)であるのに対し、②は単語レベルの問題ではなく、文法論的な原因によるものであり、代表的なものとして、「構造にかかわるあいまい文」「省略にかかわるあいまい文」「指示にかかわるあいまい文」の3種類が挙げられている(同書:8)。また、③は「語句が文の中で使われるときに出てくる文法論的な意味にあいまいさがあるもの」(同書:10)であり、④は「その分が場面や文脈の中で使われるときに出てくる意味にあいまいさがあるもの」(同書:11)であるとされている。

3. 調査対象

今回の調査を行うにあたって、20数編の論文に記載されているルーブリックの記述語を確認した。その結果、程度の差はあるものの少なからぬ数の表現を発見した。今回は、以下の論文中のルーブリックから問題のある表現を取り上げる。

- ① 貝谷敏子・菅原美樹・川村三希子・神島滋子・藤井瑞恵・工藤京子・柏倉大作・村松真澄・小田和美・中村恵子(2017)「介護演習科目へのルーブリック導入の効果・ルーブリック評価の信頼性と妥当性の検討」『札幌市立大学研究論文集』11巻1号, pp. 3-11
- ② 高岡理恵(2018)「介護実習評価におけるルーブリックの構築」『京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要』63号, pp. 11-22
- ③ 終崎京子・松永美輝恵・宮本佳子・楠永敏恵・吉賀成子「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題」『介護福祉学』25巻1号, pp. 1-10
- ④ 山田香・遠藤和子(2017)「成人看護学実習(慢性期)におけるルーブリック評価の作成と試用」『山形保健医療研究:山形県立保健医療大学紀要』第20号, pp. 41-5

4. 問題のある記述の検討

ここでは、収集したループリックの中から見出された問題のある記述について、曖昧性を含むもの、漠然性を含むもの、その他の問題のある表現の3つに分類して考察する。

4.1. 曖昧性を含む表現

ここで取り上げるのは、野田（2002）が「文法論的なあいまい文」と呼ぶもののうち、接続関係が原因でとなるものである。1つ目は、副詞節と名詞節の関係によって曖昧性を生じている²。

- (5) a. 受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら、信頼関係を築くことの重要性が理解できる
- b. 受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら、信頼関係を築くことの重要性が理解できない

「受け持ち患者・家族とコミュニケーションをとりながら、信頼関係を築くことができる」に対する5段階の評価尺度のうち、aは下から2番目の評価基準で、最も悪いのがbである³。上のaで、「受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら」は「信頼関係を築く」を修飾していると読める。しかし、bでは、同じ解釈のほか、最後の「理解できない」を修飾する解釈も可能である。bの2つの解釈を生む文の構造を以下に示す。

- (5) b' [受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら、信頼関係を築くこと] の重要性が理解できない
- b'' 受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら、[信頼関係を築くこと] の重要性が理解できない

b'では、形式名詞「こと」が作る名詞節の中に、「ながら」節が主節を修飾する複文が含まれているのに対し、b''では、「ながら」節は名詞節の中の述語ではなく、文全体の述語を修飾する構造となっている。また、「ながら」は同時進行と逆接の2つの機能を持つことが知られているが、この2つの構造では「ながら」の機能が異なる。b'では、受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取ることと信頼関係を築くことが同時に行われることを示すが、b''では、受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取っているのに、信頼関係を築くことの重要性が理解できないと、「ながら」の前後が逆接の関係となっている。

2つ目の例は、名詞節と並列節の関係によって曖昧性を生じるものである⁴。

- (6) a. 相手の発する非言語コミュニケーションを理解できず、一方的に話しかける。または、自らコミュニケーションをとることがない。

b. 一方的に話しかける、または自らコミュニケーションをとることが難しいが、指導されると改善しようと努力している。

a は、「コミュニケーション」に対する5段階の評価尺度のうち最も悪い評価基準であり、次に悪いのがbである。aの記述から判断すると、bにおいて、「または」がつなぐのは、「一方的に話しかける」と「自らコミュニケーションをとることが難しい」である。しかし、文の構造からは、「一方的に話しかける」と「自らコミュニケーションをとる」ことをつなぐという解釈も可能である。bの2つの解釈を生む文の構造を以下に示す。

(6) b' [一方的に話しかける]、または [[自らコミュニケーションをとること] が難しい] が、指導されると改善しようと努力している。

b'' [[一方的に話しかける]、または [自らコミュニケーションをとる]] ことが難しいが、指導されると改善しようと努力している。

b'では、形式名詞「こと」が作る名詞節を含む節が、「または」によって、前節と並列関係で結ばれているが、b''では、「こと」の名詞節の中に並列関係が含まれる構造となっている。文の構造からはどちらかを判断することができない曖昧な表現である。記述語をしっかりと確認すれば、「一方的に話しかける」がマイナス評価であることは理解できるため、誤った解釈で評価される可能性は少ないが、評価者に負担をかけるという点で問題のある表現と言える。

(5)のように名詞節の中に副詞節があったり、(6)のように名詞節と並列節が併用されたりすると、修飾関係あるいは並列関係が曖昧になりやすいことが分かる。その原因は、名詞節の範囲が曖昧になっていることにあるため、それを明確にすることによって、文全体の曖昧性も減じることができる。例えば、(5)b、(6)bはそれぞれ以下の(7)(8)のようにすることによって、曖昧になりにくくなる。

(7) a. 受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取ることによって信頼関係を築くことの重要性が理解できない

b. 受け持ち患者・家族とのコミュニケーションによって信頼関係を築くことの重要性が理解できない

(8) 一方的に話しかけたり、自らコミュニケーションをとることが難しかったりするが、指導されると改善しようと努力している。

(7)では、多義性を持つ「ながら」ではなく、「によって」を用いることによって、その部分が文全体の述語を修飾するという解釈がされにくくなっている。(8)では、「または」の代わりに「～たり～たり」で並列することで、並列される箇所が明確になっており、名詞節の中に並列関係が含まれる解釈は不可能となっている。

4.2. 漠然性を含む表現

ここでは、表現の意味があやふやで不明瞭になっている例を取り上げる。(9)は「規律性」を評価する3段階の評価尺度で、a、b、cの順に、優秀、良、発展途上の評価基準である⁵。

- (9) a. 職員に、適宜あいさつをした（開始や終了時、休憩の前後）
- b. 職員に、実習開始時にあいさつをした
- c. 職員からあいさつをされた時のみ、あいさつをした

1日の体験実習についての評価であれば、この記述で問題ないかもしれないが、1週間以上にわたる実習評価では問題が生じる。実習期間中すべての日を指すのか、概ね該当すればよいのかがはっきりしないという点で漠然とした表現である。そのため、例えばbで、実習中毎回実習開始時にあいさつをすることを求められているのか、概ねできていればよいのかがはっきりしない。以下のように、それを明らかにすることによって、漠然性を減じることができる。

- (9) a' 実習期間中概ね、職員に、適宜自分からあいさつをした（開始や終了時、休憩の前後）
- b' 実習期間中概ね、職員に、実習開始時には自分からあいさつをしたが、その他はできないことが多かった
- c' 実習期間中概ね、職員からあいさつされた時しか、あいさつをできなかった。

実習期間中、ほぼ自分から挨拶ができていればa'、実習開始時以外ではできないことのほうが多ければb'、実習開始時も含めできないことが多ければc'をつけることになる。また、評価尺度を増やすとしたら、a'の上に、「実習期間中に渡って（以下省略）」を加えることが考えられる。このように日々の具体的な行動を評価基準にする場合、頻度を表す表現を加えると、漠然性を減らすことができる。

漠然性を含む表現をもう一つ取り上げる。次の(10)は、「症状と検査データの関連づけができる」という評価項目に対する5段階の評価尺度のうち、aが3番目、bが下から2番目の評価基準である⁶。

- (10) a. 学修した症状に関連する主要な検査データを述べるができるが、データ値の示す意味を解釈できない。
- b. 学修した症状に関連する主要な検査データをすこし述べるができるが、データ値の示す意味を解釈できない。

bでは程度の副詞「少し」が「述べる」を修飾しているが、aには修飾語が付加されていない。そのため、どの程度述べることができれば、この尺度に当てはまるのが不明瞭となっている。もちろん、bの「少し」から推測することは可能であるが、より明確に示すためには次のように程度の副詞を付加すべきであろう。

- (10) a' 学修した症状に関連する主要な検査データをある程度述べるができるが、データ値の示す意味を解釈できない。

漠然とした表現を含む記述では、他の評価尺度の記述が不明瞭になりやすい。境界があやふやにならないように、修飾語等を付加することによって、明確な表現にすることを心掛ける必要がある。

4.3. その他

ここでは、これまでに取り上げた曖昧性や漠然性以外の問題のある記述について、考察する。次の例は、評価項目「受け持ち患者のライフスタイルと生活環境を理解し、その人らしい生活のあり方を考えることができる」に対する5段階の評価尺度のうち、それぞれ下から2番目と最も低い尺度の評価基準である⁷。

- (11) a. 受け持ち患者のライフスタイルと生活環境について情報収集できる

- b. 受け持ち患者のライフスタイルと生活環境について理解したり、その人らしい生活のあり方を考えることができない

bにおいて、「受け持ち患者のライフスタイルと生活環境について理解」すること、「その人らしい生活のあり方を考えること」の両方ができない場合は問題ないが、前者はできるが後者まで及ばないという場合はどう評価するべきか疑問が残る。また、aの「情報収集」は、理解の前段階だと考えられる。そのため、情報収集はできるが、十分には理解できていないということも想定される。その場合も、どのように評価すべきか判断に迷うであろう。

次の例は、評価項目「症状が対象者の生活・心に及ぼす影響を述べるができる」に対する5段階の評価尺度のうち、それぞれ上から2番目と中央の尺度の評価基準である⁸。

- (12) a. 学修した症状に関して対象者の生活・心に及ぼす影響を完璧ではないがほぼ理解し述べることができる。

- b. 学修した症状に関して対象者の生活・心に及ぼす影響をほぼ述べるができる。

いずれにも「ほぼ」が用いられているが、述語を見ると、aは「理解し述べるができる」、bは「述べるができる」という違いがある。「述べる」ためには「理解する」ことが前提となると考えられるため、この述語の違いは評価の参考になりにくい。aの「完璧ではないが」によって、両者の差異が示されているが、より明確に違いを示すためには、bの「ほぼ」を他の副詞に変更すべきである。

以上の例では、述語の表す意味範囲がオーバーラップしており、それぞれの評価基準が弁別的になっていないという問題がある。隣り合う評価基準同士が弁別的になるように、述語や修飾語の選択を工夫する必要がある。

5. おわりに

本稿では、看護・介護分野を中心に実習評価ルーブリックを収集し、評価基準の記述について個別に検討した。曖昧性や漠然性のために評価のぶれが生じる恐れのあるものを抽出したのち、曖昧または漠然とした表現となっている原因について、日本語学的観点から検討した。

今後も、実習評価ルーブリックの記述の問題点について異なる観点から研究を行うとともに、評価者の主観等によって左右されにくい評価基準を記述するための一般的ルールを提示することを目指したい。そのことによって、高田短期大学高等教育研究会で開発を進めている介護実習評価ルーブリックを、より適切な評価が可能になるようなものにすることができると考えている。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)一般 課題番号19K02261 によるものである。

注

- 1 英語では、曖昧性が *ambiguity*、漠然性が *vagueness* と明確に区別される。
- 2 山田・遠藤（2017）， p. 44
- 3 評価尺度とは、与えられた課題がどれだけ達成されたかを表すものであり、評価基準とは、具体的なフィードバック内容である（ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ 2014）
- 4 高岡（2018）， p. 19
- 5 柘崎他（2018）， p. 4
- 6 貝谷他（2017）， p. 11
- 7 山田・遠藤（2017）， p. 44
- 8 貝谷他（2017）， p. 11

引用文献

- 今仁生美（2006）「曖昧性」鈴木良次編『言語科学の百科事典』丸善， pp. 34-35
- 貝谷敏子・菅原美樹・川村三希子・神島滋子・藤井瑞恵・工藤京子・柏倉大作・村松真澄・小田和美・中村恵子（2017）「介護演習科目へのルーブリック導入の効果・ルーブリック評価の信頼性と妥当性の検討」『札幌市立大学研究論文集』11巻1号， pp. 3-11
- 高岡理恵（2018）「介護実習評価におけるルーブリックの構築」『京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要』63号， pp. 11-22
- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、佐藤浩章監訳、井上敏憲・俣野秀典訳（2014）『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部
- 野田尚史（2002）「日本語のあいまい文」『日本ファジィ学会誌』14巻1号， pp.7-14
- 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦（2018）「介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題－実習施設へのアンケート調査から－」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第4号、

pp. 35-46

終崎京子・松永美輝恵・宮本佳子・楠永敏恵・吉賀成子「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題」『介護福祉学』25巻1号, pp. 1-10

山田香・遠藤和子（2017）「成人看護学実習（慢性期）におけるルーブリック評価の作成と試用」『山形保健医療研究：山形県立保健医療大学紀要』第20号, pp. 41-51